



# 紙はいさめる

## 津村記久子

メモをとるのが好きで、携帯のテキスト編集アプリにもものすごくいろいろなことを書いています。決まった時間がなく、日に何度でも書く日記のようなものだ。けれども、あまりに手軽に文章が編集できてしまうため、気が付いたら膨大な愚痴を書き込んでいて、後で読み返してより落ち込むことがある。携帯のメモの中のわたしは、整ったフォントでもものすごく怒っていたり、すべてを投げ出そうとしていたり、うまくいかない物事を延々とあげつらっている。延々と。字はきれいだけど言ってることはものすごく見苦しい。

デジタルのきれいなフォントは、いかにももつともらしくめっちゃくちゃな言説を読む者に刷り込んでくることもある、というのは自分でもわかっていたので、一か月ほど前から日記的なメモをとる場所を紙のノートに切り替えた。わたしは

字が汚くて、汚い字は内容の信頼度を低く見せる。何を言っているか、こんな汚い字で何言っているんだ、というところに最終的には落ち着く。ノートは二十年以上前の、おそらく大学生の頃に買ったそのままだけの今でも持っているノートにした。B5ノートにしては珍しい大理石調の表紙がなんだか高級感があって、今まで使わなかった。ちなみに、二十年以上前に買ったと思われるノートはたぶん五十冊以上は所持している。文章を書くこと以上に、紙のノート自体がすごく好きなので、持っているだけで満足なのだが、さすがに四十歳を過ぎたので一冊使ってみようと思っておろした。落ち込んでいた日だったけれども、どれを使ってみようか選んでいる間は少しだけわくわくした。

結果から言うと、紙にシャープペンシルで書く、という身体性は、わたしの考えていることをかなり補正してくれたように思う。携帯に溜め込んでいた憂鬱さより、紙に書いてある内容の方が明らかに冷静なのだ。理由はよくわからない。汚い字だからあまりに何かに文句を言い過ぎるのは気が引けるということなのかもしれないし、携帯に文章を書き込むより



つむら・きくこ●作家。大阪府生まれ。2005年「マンイーター」で太宰治賞を受賞しデビュー。08年「ミュージック・プレス・ユー!!」で野間文芸新人賞、09年「ポストタイムの舟」で芥川賞、11年「ワーカース・ダイジェスト」で織田作之助賞、13年「給水塔と亀」で川端康成文学賞、17年「浮遊霊ブラジル」で紫式部文学賞など受賞多数。

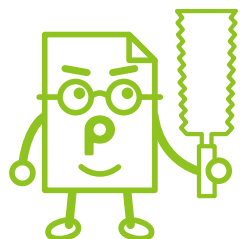
はほんの少しだけ労力があるので慎重になるのかもしれない。ただ、紙にペンや鉛筆で字を書くときのあのわずかな引っかけはとても心地いい。携帯での文字入力もずいぶんうまくなったけれども、紙に字を書く時ほどの喜びはないように思う。そしてその喜びは、怒りや不当だという気持ちを抱えた自分を静かにいさめてくれる。

日記のようなメモのようなものとは違って、小説の初期段階でのあらすじを作る作業も、この半年ぐらいいは紙に戻している。どれだけデジタルの方が編集が容易でも、まずは紙の上で話を作らないと不安になる。文章そのものを書く作業も気が重いけれども、あらすじを作る作業はそれ以上だ。でも「ペンで紙に書ける」ということを頼りに、なんとか進めている。一覧性が高かったり、これまでの作業量が目瞭然なことも嬉しい。自分の小説の出来上がりは楽しみじゃないけど、「ここまでやった」という紙の束を厚くするためなら、明日もがんばれる。

### ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

#### 伐ることので育つ森がある。

木を伐りすぎると森が減る。でも、何もしないと隙間なく木が生えてきて、日当たりが悪くなってしまいます。森がすくすく育つためには、木を伐ること(間伐)も大切。さらに、そのとき伐った木(間伐材)は無駄にせず、紙づくりの原料にも使われているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、[「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。](http://kamitsubu.com/) <http://kamitsubu.com/>

今回は6月6日号、ちばてつやさんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo:Shiro Miyake